

二月から遠く隔てられて

畑中 佳恵

「今この場所で満腹・平穏に重ねている日々」

と書き付けた二月。あれは会報のためのエッセイ。「原爆」をめぐり、日常から切り離せない「お腹にずしんとくる」当事者性に敏感であろうとしていた私は、その平穏な日常を先々まで約束されたものと信じ込んでいた。一抹の後ろめたささえ感じるほどに。目指すは、「今」の多数が「過去」とみなし切り離す出来事に繋がり、関わり直し、問題提起すること。つまりは、自身の感覚を研いで「あえて当事者となる」こと。それは決して無意味でないとして、満腹の最中まで否応なしにずしんと傷みが鳴り響くような、そんな日々を送っていたわけではなかったと、告白しなければならぬ。二月からかくも隔てられるまで、持つことのできなかつた視角。

三月。私は「ただちに影響はない」と繰り返すテレビを消しては点けしながら、一番大きなスーツケースに娘の身の回り品を詰め込み、航空券の予約状況を血眼で追っていた。余震なのか自分だけが揺れているのか紛らわしい感覚。一五日の夕飯前には、津波の映像ばかり見せてしまった娘を曇天の下に連れ出した。小半

時歩いて誰にも会わなかった。ぬるい風。坂道を登り切って何の変哲もなかった景色を、これから幾度思い起こすだろう。「計画停電」の予定時刻がくると、窓から見渡す限りの家々が自主的に明かりを落とした。

一八日からちょうど二ヶ月間。福岡に逃げて、ひたすら冷温停止を願って暮らす。願い叶わず娘と川崎に戻るとき、見えない物質の見えない刃を、なんとしても見ねばならぬと決意した。以前の二倍に値上がりしたウクライナ製テラ MKS-05 を取り寄せ、説明書も開くのもそこそこに、自宅リビングや寝室、玄関、庭、道路、側溝、公園の至る所を計測。リビングのガンマ線は毎時0.15、0.15マイクロシーベルト。水拭きしては計り直す。公園の端つこのベンチは0.16。そつとママ友に知らせた。

校正アロカで0.10のところ、テラは0.12-0.16を示すという。テラの自己ノイズはおよそ0.04。地質学会によると居住区のバックグラウンドは0.018-0.036。事故前のざつと二〜三倍と解釈。ベータ線測定は、一平方センチメートルあたり一分間に検出される粒子の数をみるもの。アルミ遮断なしで自宅玄関土間が0.015。これが実際何を意味する数値なのかネットを漁る。しかるに、こんなときこそ昔取った杵柄なのに、ガンマ線数値の安全ラインさえ見つけ出せない。チェルノブイリの汚染区域基準値が一平方メートルあたりのベクレル表記ならば、シーベルトからベクレルへの換算もしてみる。断片的な言葉がふいに焼き付く。「福島発の放射能は二年後に四分の三、六年後に半分まで減衰します。」嬉しいか？正直、わからない。あの時刻に通り返した線量を知ったときの気持ちさえ、もう定かでないのに。

早朝にパソコンを開いて情報を集めるのが、欠かせない日課となった。「市内の環境放射線量の測定状況について」、「放射性セシウムの一回収取と長期摂取による体内残存量の経時推移」、「OKフード」、「首都圏土壌調査結果」、「各都道府県における水産物放射性物質調査結果」、「食品の放射能検査データ」……。購読している新聞からは有用な情報がほとんど得られず、こんな文章を切り抜くことになる。《政府の安全基準は満たしているが、福島産の作物なので万が一、線量を帯びているかも知れないから買わないようにしましょう。こうした忌避行為は、原発事故の災厄を浴びた人たちを、もう一度、間接的に殴りつけているに等しい。》(武田徹「断ち切られる被災地との絆」『朝日新聞』2011・9・27)——もはや県境などでは捕捉できぬ広範な事故被災地と被災者たちを、一と他に断絶させ殴り合わせることで、得をするのは誰なのか。最初の取り返しつかない一撃。守るためでなく覆い隠すためにかざした掌。その手の主は誰なのか。私はこれから先、ただ生きることが人を殴ることにつながるかもしれないという畏れをたずさえて、なお生きる。見苦しくてもいい。生きて反省し怒り伝えねばならない。

更新毎にうねり飛び散り禍々しさを増す「早川マップ」を地名とセツトで頭に叩き込み、スーパーへ行くと、野菜売り場、肉売り場、立ちつくす時間ばかり増えた。国産牛、近海魚、キノコ、隣人のカゴに納められるのを呆然として見送る。どうするか。野菜の種を買ってみる。西から水を取り寄せる。卵も、牛乳も。二年度産の米を探しては自力で真空パックして納戸に積む。内部

被曝は外部被曝の九倍、あるいは六〇〇倍。幼児はそのウン百倍。頭の中は細切れの情報が行き交うばかりで、なかなか文章の体をなさない。かつては一番の理解者から、ため息、諦め、嫌悪感、拒絶、ひしひし伝わってくる。結論を欠いた説明もどきでは、見えない刃を見たくない人の祈るような気持ち、動かさぬ。

それでも、はやばや立ち止まるわけに行かないから、いまは自分の直感と感情を総動員して自分の体を動かす。たつて三歳児の、いや三九歳だつて六〇歳以上だつておしつこからベクレル出ていわけないでしょう。とりわけ我が子が内からも外からもジリジリ貫かれ壊されるなんていやだ。だから、雨には決して濡らさない。風が暴れる日も注意。来年度からお世話になる幼稚園の先生に、提供中の牛乳の検査結果について資料を渡す。紙は重ねられたまま、「ご心配は分かりますが、国が安全と認めているものですから」と、愚かな母を哀れむような笑顔が返ってきた。

昨日。「た、たちに影響はない」と繰り返してきた元・官房長官が、衆議院予算委員会で答弁した。あの言葉は主に飲食食物についてである、食品の暫定基準値は一年間摂取し続ければ健康に害を及ぼす可能性がある、その他。私たちが平穩でなくなった日々には疲れ果て、どんな言葉も素通りさせると計算尽くなら大間違いだ。あなたたちの言葉を僅かばかりであれ先回りして、身近な人々を必ず守りぬく。抜け目なく足下をすくおうとする言葉を、そのような言葉として名指しし、退け、専門外であろうと何だろうと自他のための言葉を紡いでいく。諦めない。いま、私が念じている私たちとは、そんな否応なしの当事者である。